

原 著

「ブラジル・サッカー史像」とプレイスタイルをめぐる言説との歴史的連関

山本 英作^{1*}

要約：ブラジル・サッカーの歴史について思い描くイメージ、すなわち「ブラジル・サッカー史像」は、ブラジル人によって歴史的に構築されてきた。本研究では、ブラジル・サッカーのプレイスタイルを表現する言説もまた歴史的に変化してきたのではないかと調査を行った。彼らの自国サッカー史の見方が3段階に変化している可能性を従来の研究において指摘してきたことから、これを援用して、第1期（1940年代～60年代）、第2期（1970年代～80年代）、第3期（1990年代～現在）という時期区分を設定し、各期における代表的な言説を検討した。その結果、プレイスタイルをめぐる言説についても、①リオデジャネイロの黒人・混血選手に注目したローカルな見方、②ブラジル社会を生きる国民（民衆）に注目するナショナルな見方、③世界の中にブラジル・サッカーを位置付けるグローバルな見方という、再構築されるサッカー史像と密接に関連した歴史的展開が見られることを確認した。

キーワード：ブラジル・サッカー、歴史像、プレイスタイル、言説

1. はじめに

ブラジル・サッカーの歴史について思い描くイメージ、すなわち「ブラジル・サッカー史像」の歴史の変遷を検討すれば、1940年代～1960年代に「人種デモクラシー神話」に基づいて描かれたブラジル・サッカー史像が、近年、再考されていることに気付く。今日のブラジル人サッカー史家らは自国サッカー史を、かつてジャーナリストが叙述したようなリオデジャネイロの黒人・混血選手

に注目したサクセス・ストーリーというローカルな視点で捉えるのではなく、もっとグローバルな視点で捉え直そうとしている。

筆者は、これまで取り組んできたブラジル・サッカー史像の再構築過程に関する研究を通じて、ブラジル・サッカー史の研究動向をレビューし、ブラジル人による自国サッカー史の見方が表1に示すように大きく3段階に変化してきたのではないかと可能性を指摘した（山本，2003，

表1 ブラジル・サッカー史像の歴史的変遷

時期区分	ブラジル・サッカー史の見方
第1期（1940年代～60年代）	リオデジャネイロの黒人・混血選手に注目したローカルな見方
第2期（1970年代～80年代）	ブラジル社会を生きる国民（民衆）に注目するナショナルな見方
第3期（1990年代～現在）	世界の中にブラジル・サッカーを位置付けるグローバルな見方

^{1*}高知学園短期大学 幼児保育学科 Email: eisaku@kochi-gc.ac.jp

2005)。

しかし、従来の研究では、第1期(1940年代～60年代)は「リオデジャネイロの黒人・混血サッカー選手」に、第2期(1970年代～1980年代)は「ブラジル社会を生きる国民(民衆)」に注目する視点が明らかであった一方、第3期(1990年代～現在)のブラジル・サッカー史像が具体的に「だれ」に注目する見方なのかを明確に提示することができていなかった。

そこで、本研究では、従来検討してきた諸資料やこのたび新しく入手した資料をブラジル・サッカーの「プレイスタイルをめぐる言説」に着目して読み直し、それらと「ブラジル・サッカー史像」との歴史的連関を明らかにする。サッカー史像とプレイスタイルの両方についての言及が見られる資料の中では、両者をめぐる言説は同じ歴史的文脈で叙述され、「プレイ」の主体が「サッカー史像」の主人公と一致しているのではないかと考えるからである。その対応関係を見ていく作業を通じて、第3期の「世界の中にブラジル・サッカーを位置付けるグローバルな見方」が具体的に「だれ」に注目しているのかを考察したい。

ブラジル・サッカーのプレイスタイルに言及する論考は、本研究で引用した先行研究をはじめとして、ブラジル国内の研究成果に数多く見られる。しかし、筆者が注目する「ブラジル・サッカー史像」とプレイスタイルとの関係性について考察しようとする試みは、管見の限り見当たらない。

2. フットボール・アルチ (futebol-arte)

ブラジル・サッカーのプレイスタイルを表現するとき、ブラジル人は一般に「フットボール・アルチ (futebol-arte)」(直訳すればアート・サッカー、技芸のサッカーの意)という言葉を用いる。ブラジルで出版されている2つのサッカー事典でこの言葉の意味を調べてみると、次のような説明が得られた。

事典1 *Dicionário de futebol*

ドリブル、派手なプレイ、ショートパスの交換、ヒールキック、ダイビングヘッド、バイシクルキック、長い距離の完璧なパス、アクロバティックな守備、不可能と思われるゴールを決めることなどに見られる、抜け目なさ (malícia) や即興性 (improvisação) によって特徴付けられるサッカーであり、その中においては戦術的な厳しさの代わりに選手の妙技や即興性が用いられる。

【Maranhão, 1998 : 127】

事典2 *Dicionário popular de futebol*

サッカーがヨーロッパ化していく傾向に対して、ブラジル人が常にその典型的な例とされるような、とりわけ巧妙なボールタッチやパスを駆使して効力を発揮するサッカー。Gilberto Freyre が述べたように、ブラジル・サッカーはその基礎や技術において、サンバおよびカポエイラから相手を眩惑する動きやリズムなどの文化遺産を受け継いだ。

【Penna, 1998 : 113】

なお、futebol-arte の類義語として「スペクタクル・サッカー (futebol-espetáculo)」が、反意語として「パワー・サッカー (futebol-força)」や「結果重視のサッカー (futebol-resultado)」などが挙げられている。

3. 第1期(1940年代～60年代)における

プレイスタイルをめぐる言説

ブラジル国内でサッカーに関する歴史研究が未着手であったおよそ1970年代までの時期に、自国サッカー史の叙述を担ったのは専らスポーツ・ジャーナリストたちであり、その中心的存在が Mário Filho であった。

彼が主にリオデジャネイロのサッカー界を舞台に描いた歴史小説『ブラジル・サッカーにおける黒人』(Mário Filho, 1964) の冒頭には、彼と親交のあった社会学者 Gilberto Freyre が同書の初

版（1947年刊行）に寄稿した文章が掲載されている。

そこでは、まず「Mário Filho の表現を借りて述べるならば」と断ったうえで、ブラジル・サッカーの特徴的なプレイスタイルが黒人選手の所与のものとして小説に描かれていることが解説されている。

Machado [小説家] の文学作品に何か凝縮したようなブラジルのものが存在するように、Domingos [黒人サッカー選手] のプレイにも濃密なブラジル性のようなものが存在すると言わざるをえない（中略：筆者） Domingos のプレイの本質や Machado の文学作品を研究する者は、両者の根源として、自らをブラジルの純正たらしめているもの、すなわち、サンバの片鱗、バイーア [黒人が多く住むブラジル北東部州] の黒人っ子のいたずらの片鱗、さらにはペルナンブコ [ブラジル北東部州] の人々の capoeiragem [カポエイラの技] の片鱗やリオデジャネイロの人々の malandragem [創造性、臨機応変さ、狡猾さ] の片鱗を確かに発見するであろう。これらの名残りによってブラジル・サッカーは、非常に統制のとれた英国サッカーの原型からかけ離れ、それ自体、非合理的な驚きとディオニュソス的な多様性に満ちたダンスのようになったのである。そのダンスは、Leônidas [黒人サッカー選手] のような選手によってはバイーア風に踊られ、一方、Domingos [黒人サッカー選手] のような選手によっては、彼の人格や性格に与するアメリカ大陸インディオ的な想起や影響をおそらく拒絶するような冷やかさをもって踊られる。しかし、いづれにしてもダンスなのだ（後略：筆者）。

【Mário Filho, 1964：緒言】 [] 内は筆者が加筆

Gilberto Freyre がブラジル北東部ペルナンブコ州の地方紙 *Diário de Pernambuco*（1938年6月17日付け）に寄せたコラム「ムラト（混血）のサッカー」（Foot-ball Mulato）には、1938年ワールドカップ（W杯）フランス大会で活躍したブラジ

ル代表チームのプレイスタイルに関する彼のコメントが紹介されている（Soares, 2000）。

[フランス W 杯大会中のブラジル人選手のパフォーマンスについて質問された Gilberto Freyre は、] 私はレポーターに次のように答えた（中略：筆者）今年、われわれの勝利に作用した条件の一つは、アフリカ系ブラジル色の強いチームをヨーロッパに派遣するというのをいいにやり遂げたその勇氣にあると思われる。もちろん何人かは白人だが、チームの大部分はこれぞブラジル人というべき黒人選手であり、さらにもっとブラジル人らしいムラトの選手であった（中略：筆者）思うに、われわれのサッカーのプレイスタイルは、驚き、器用さ、ずる賢さ、軽妙さと同時に個人の自発性との集合体であるという点でヨーロッパのそれと対照的である（中略：筆者）われわれのパス、pitús [フェイントの一種]、眩惑的なプレイ、ボール扱いの巧みさなど、サッカーのプレイにおけるブラジル・スタイルを特徴付けるダンスや capoeiragem [カポエイラの技] のようなもの（後略：筆者）。

【Soares, 2000：426】 [] 内は筆者が加筆

その内容はアフリカ系ブラジル人選手およびムラトの選手を賞賛するものであり、Gilberto Freyre がブラジルの混血文化を積極的・肯定的に評価する思想が十分に反映されている。Gilberto Freyre の理念はその後、ブラジル政府が標榜する国是「人種デモクラシー」に理論的根拠を与えるものとして社会全体に浸透していくことになり、Mário Filho の小説に強い思想的影響を与えることになった。

4. 第2期（1970年代～80年代）における

プレイスタイルをめぐる言説

第2期には、ブラジル国内でサッカーに関する人文社会科学分野の諸研究が開始される。それまでスポーツ・ジャーナリストらの叙述に委ねられていたブラジル・サッカー史の叙述は、同時期以

降、大学等研究機関の歴史学、文化人類学、社会学の領域で学術的議論の俎上に載るようになった。

リオデジャネイロ連邦大学附属国立博物館 (Museu Nacional) の文化人類学研究グループ代表であった Roberto DaMatta は、研究論文集『サッカーの宇宙—ブラジルにおけるスポーツと社会—』(DaMatta, 1982; ダ・マータ, 1983) の中で、ブラジル人のプレイスタイルについて次のように述べている。

フットボールと政治の世界で分け隔てなく自由に使われる、ある言い廻しがある。(中略:筆者) それは、ブラジルで非常に一般的に使われる言い廻しである、ter (ou não ter) jôgo de cintura、つまり、腰でプレイする (しない)、あるいは、尻をひねる (ひねらない) という表現 (中略:筆者) 後で盛り返すため、不利な状況を有利なものに変える余地を残しながら、折れずに曲がることのできる人間 (中略:筆者) ブラジルのフットボールには、jôgo de cintura、つまり狡猾さと臨機応変さが不可欠な要素であるということは衆知のとおりである。(中略:筆者) 単純だが正確なひとつの動きでもって敵の攻撃をかわし、自分自身を敵から解放する (中略:筆者) 敵の正面攻撃をまともに受けるより、うまいひねりで相手をかかわして自分の動きを自由にし、かわされた敵がその勢いから立ち直って大勢を入れ替える前に、ふいを突くのである。優秀なフットボール選手と賢い政治家は、ブラジル社会の黄金律が、いかに困難な状況からうまく立ち直れるかにかかわっており、そのすべてが非常に容易であったと他の者たちが思い込んでしまうように、極力鮮やかに、品よく困難を切り抜けることができるかにあることを熟知している。

【ダ・マータ, 1983: 263-264】

DaMatta によるプレイスタイルの記述は、黒人や混血など特定の人種を選ばないものであり、ブラジル社会を生きる人々の、いわばナショナルな

民衆文化としての見方に基づいている。伝統と近代が混在し、極度に不平等で、多様で複雑な諸要素を同時に抱えているブラジル社会において、ブラジル人が困難を乗り越え、しなやかに抜け目なく生き抜いていく「術、技芸 (arte)」を、DaMatta が描くブラジル人のサッカースタイルは演劇的に提示している。

5. 第3期 (1990年代~現在) における

プレイスタイルをめぐる言説

第3期には、ブラジル体育・スポーツ史学会の創設 (1993年) を契機にブラジル・サッカー史研究が組織的な発展を遂げ、それまで長らく公認されてきた Mário Filho のサッカー史像が批判され、それを多様に再構築しようとする Antonio Soares らのブラジル・サッカー史像が提示された。

Soares を中心とするガマフィーリオ大学のサッカー史研究グループは、ブラジル体育・スポーツ史学会第9回大会 (2004年) において行った研究報告『『サッカーの国 (Pátria de Chuteira)』は消えつつあるのか?』(Soares, 2004) の冒頭で、世界サッカーのグローバル化とブラジル・サッカーの関係について次のような見解を示している。

諸国代表チーム間の幅広い交流と連動して、クラブや国の間では選手移動の激しいプロセスが繰り返されている。そのような傾向は、選手のプレイの様式や監督 (この職業もまた世界サッカー市場で流通しているのだが) による戦術の組み立ての画一化をもたらしているようである。プロスポーツをめぐるこの新たなダイナミズムは、スポーツの各種競技会がメガイベント化し、収益率の高い国際的ビジネスと化している構図と直接的に結びついている。「サッカーにおけるブラジル・スタイル」の消滅や国外で活躍するスター選手らの「ブラジル代表ユニフォームへの愛情」の消失を嘆く声は、純粹で真正な「過ぎ去った時代」を追い求めそこへ復帰しようとする意思の表象であると解釈でき

よう。このように語ることもまたグローバル化との対話のひとつの形態であると言わざるをえない。

【Soares, 2004: 339】

このような問題意識を抱きつつ Soares らは、ひとたびサッカーの「ブラジル代表チーム」がトピックスとなった場合、グローバル化のプロセスは新聞報道の言説内容を変化させるのではないか、という仮説を立てる。そして当地新聞 *Jornal do Brasil* 紙の同時代記事を資料として、1958年と1962年のW杯優勝時（2連覇）、および2002年の優勝時における言説を比較分析していくのである。

1958年W杯報道のブラジル・サッカーのプレイスタイルに関する言説は、控えめな、やや自信なさげなものとして捉えられ、その弱みを補うために「南米スタイル」という概念が引き合いに出されていると考察している。

ブラジル代表が大会初日を迎える前日、*Jornal do Brasil* 紙は「勝利のために、初戦では『遊び半分のプレイ』をしないこと」という見出しを掲げた。「サッカーにおけるブラジル・スタイル」と呼ばれるものに付随するイメージは、歓び、即興性、派手なプレイ、ドリブル、ヒールキック、および「遊び半分のプレイ (firulas)」である。ここで「初戦」で求められるプレイとは、個人技よりも戦術面に価値を見出すヨーロッパ型のサッカーの特徴として解釈されるだろう。当時のコンテキストの中で書かれた新聞報道は、ヨーロッパのサッカーに対峙したブラジル・サッカーのアイデンティティの有効性を疑問視していた。

(中略：筆者) 新聞報道は、ナショナル・アイデンティティと結びついた諸要素について自信なさげに伝えている。ヨーロッパ・スタイルに対置させた南米スタイルの差異を主張する記事は、この場合の南米スタイルがブラジル・スタイルを包括しているのだということを暗に繰り返

返し提示していた。

(中略：筆者) ここでの議論はナショナル・アイデンティティと結びついた諸要素についてのもではなく、大陸間のアイデンティティに関するものである。私たちは分析に次のような注釈を付けなければならない。すなわち、2002年W杯で「サッカーにおけるブラジル・スタイル」をめぐる議論がいくつかの新聞記事に提示されているとすれば、1958年W杯においてはナショナル・スタイルに秀でたものとして南米スタイルが考えられ、この時に対峙した「他者」はヨーロッパであった。ブラジルは未だかつて一度もタイトルを獲ったことがなかったのであり、それまでに2回優勝していたのはウルグアイに過ぎなかった、という事実を思い出す必要がある。

【Soares, 2004: 343-344】

1962年W杯報道では、前回大会における初優勝の自信から、世界を相手に戦うブラジル代表チームの競技レベルについて他国の監督、選手、ジャーナリストらに意見やいわゆる「太鼓判」や「お墨付き」のようなコメントを求めるインタビュー記事数が大幅に減少する傾向が示されている(1958年W杯時の33.3% [13/39記事] から6.6% [5/75記事] に減少。Soares, 2004: 346)。

また、1958年大会や2002年大会の時と同様に、W杯本大会でブラジルが勝ち進むにしたがって「ブラジル・スタイル」のアイデンティティに言及する論調が強くなっていく傾向が示されている。

さらには、大会で最も活躍が期待された選手 Pelé が第2戦で負傷したために、皆の注目と期待が Garrincha というもう一人の中心選手に集まったという事実が述べられる。

チームの勝利のたびに街路に溢れ返る歓びについて新聞記事は報じ、このような感情はW杯の決勝戦が近づくとしたがつてさらに増して

いく。決勝当日の新聞には、「最後のドリブル」、「W杯は、普段どおりの悪童 Mané Garrincha に審判を下す」、「ブラジルはチームを変えることなくタイトルを決める」(中略:筆者)などの見出しが掲載される。これらの記事は、Garrincha の姿に同大会を具現化しつつブラジル人選手の個人的なタレントを際立たせているだけでなく、代表チームが優勝候補に挙げられ実際に勝利に向かって活躍していく偉大なキャンペーンを演出している。Garrincha は、喜びと眩惑的な動き (ginga) に溢れたわれわれのサッカーのアイデンティティのパラダイムとなっている。

【Soares, 2004 : 346】

2002年W杯報道では、プレイスタイルをめぐる言説とは別に、1958年や1962年の調査には見られなかった新しい傾向が指摘されている。国際的なスター選手をセレブリティとして扱う傾向、および、彼らに幾重ものアイデンティティが投影されている傾向である。

今日、David Beckham や Ronaldo のような選手は、さしあたりメディアに登場する機会が最も多いことで引き合いに出されるが、彼らはスポーツ選手としての競技力のみならず企業のブランドや製品に対して付加しうるポジティブなイメージによって契約を結んでいる。無視できないのは、これらの選手は所属クラブからサラリーを受け取る上に多国籍の大企業との個人的な契約関係を有する点であり (中略:筆者) 彼はブラジル人であり、そのことが紙上で強調されるのだが、同時に Ronaldo のイメージはナイキ (Nike) や他の商標と結びついているという見方は無視できない。このように国境を超えたアイデンティティの「多層化」は新しい現象であるが、新聞記事において国家は依然として強力なシンボルであり主題であり続けている。

【Soares, 2004 : 341-342】

1958年、1962年、2002年のW杯優勝を報じた *Jornal do Brasil* 紙の記事分析の結果、ブラジル・サッカーのプレイスタイルについて表明された言説は決して一様でなく、大会ごとに変化していることが明らかにされた。また、眩惑的な動き (ginga) やドリブルに価値を置くブラジル独自のスタイルは、「勝った試合ではポジティブに讃えられ、負けた試合ではネガティブに批判される」 (Soares, 2004 : 347) との傾向が指摘された。

最後に、Soares が Ronaldo Helal (リオデジャネイロ州立大学) と共著でアルゼンチンの体育・スポーツ史電子ジャーナル *efdeportes.com* に発表した最近の論文『『サッカーの国 (La Patria de Botines)』の凋落：2002年ワールドカップにおけるジャーナリズム、サッカー、およびナショナル・アイデンティティ』 (Helal & Soares, 2005) は、ブラジル・サッカーのプレイスタイルをめぐる議論がとりわけ4年に一度のW杯におけるブラジル代表チームの試合の際に問題とされる点を指摘している。

この「ブラジル・スタイル」をめぐる議論が [国内のクラブ間で競われるリーグ戦など] ローカルな試合において表明されることは稀である、という事実がわれわれは注目する。ローカルなチーム間で戦われる試合では、マスコミは試合における「勝利」や選手の「勝負強さ」のほうを評価する。各州リーグやブラジル全国選手権の常勝チームについては、より「秩序が整っている」ことや「決定力」があることが説明され、「ガッツ」があり「戦術的な厳しさ」を備えていることが解説される。「フットボール・アルチ (fútbol-arte)」という審美的な側面は、実際、ブラジル代表チームの試合だけに要求されるのであって、この代表チームを問題にする場合に、私たちは日常のサッカーとは分離された世界と向き合うのである。

【Helal & Soares, 2005】

[] 内は筆者

6. おわりに

本研究で明らかにしたことは、以下の3点である。

(1) 第1期に見られる「プレイスタイルをめぐる言説」では、社会学者 Gilberto Freyre が黒人・混血選手に注目しており、その視点がジャーナリスト Mário Filho の「ブラジル・サッカー史像」に影響を及ぼしているということが明らかになった。

(2) 第2期に見られる「プレイスタイルをめぐる言説」では、文化人類学者 Roberto DaMatta がブラジル社会を生きる人々に注目しており、その視点は彼の「ブラジル・サッカー史像」の見方と一致するということが確認された。

(3) 第3期に見られる「プレイスタイルをめぐる言説」では、サッカー史研究者 Antonio Soares らがW杯におけるブラジル代表チームに注目しており、その視点が彼の「ブラジル・サッカー史像」の見方と一致するのではないかという可能性が示された。

結果として、「プレイスタイルをめぐる言説」については、①リオデジャネイロの黒人・混血選手に注目したローカルな見方、②ブラジル社会を生きる国民(民衆)に注目するナショナルな見方、および③W杯におけるブラジル代表チームに注目したグローバルな見方という、再構築されるブラジル・サッカー史像と密接に関連した歴史的展開が見られることを確認した。

7. 付記

本研究は平成17年度～平成18年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「ブラジル・サッカー像の形成過程に関する歴史的研究」による成果の一部であり、日本体育学会第56回大会(2005年11月、つくば)で報告したものである。

8. 引用文献

DaMatta, Roberto (ed.) (1982): *Universo do futebol: esporte e sociedade brasileira*. Rio de Janeiro: Pinakothek. [邦訳] ロベルト・ダ・マータ

(1983) 社会の〈内〉なるスポーツ—国民劇・国民祭としてのフットボール. ヴィクター・ターナー, 山口昌男編 (1983) : 見世物の人類学. 東京:三省堂, pp.246-287.

Helal, Ronaldo and Soares, Antonio Jorge (2005): El caso de 'La Patria de Botines': periodismo, futbol e identidad nacional en el Mundial de 2002. 電子ジャーナル *efdeportes.com*, No.86. Julio de 2005, Buenos Aires.

Maranhão, Haroldo (1998): *Dicionário de futebol*. Rio de Janeiro: Record.

Penna, Leonam (1998): *Dicionário popular de futebol: o ABC das arquibancadas*. Rio de Janeiro: Nova Fronteira.

Rodrigues Filho, Mário (1964): *O negro no futebol brasileiro*, 2a edição. Rio de Janeiro: Civilização Brasileira.

Soares, Antonio Jorge (2000): Futebol brasileiro: Reiterando a tradição freyreana. *Anais e Resumos: VII Congresso Brasileiro de História da Educação Física, Esporte, Lazer, e Dança* (ブラジル体育・スポーツ史学会第7回大会報告書), pp.425-430.

Soares, Antonio Jorge, et. al. (2004): A pátria de chuteira está desaparecendo? *Anais e Resumos: IX Congresso Brasileiro de História do Esporte, Lazer e Educação Física* (ブラジル体育・スポーツ史学会第9回大会報告書), pp. 339-348.

山本英作 (2003) : ブラジル・サッカー史像の構築・再構築—ブラジル体育・スポーツ史学会 (1993年～2002年) における研究動向を手掛かりに一. 日本体育学会体育史専門分科会 2003年度秋の定例研究集会, 口頭発表, 熊本, 2003年9月.

山本英作 (2005) : ブラジル・サッカー史像と1980年代. 日本体育学会体育史専門分科会 2005年度春の定例研究集会, 口頭発表, 広島, 2005年5月.

Original Paper

The Historical Relationship between “the Images of Brazilian Soccer History” and the Discourses on Brazilian Soccer Style

Eisaku Yamamoto^{1*}

Abstract: “The images of Brazilian soccer history” have been historically constructed by Brazilians. It is supposed that the discourses expressing Brazilian Soccer style have been constructed in the similar process, so this study intends to make sure of this historical relationship. On the basis of preliminary bibliographical review, the periodization for this study was divided in three: the first period is from the 1940s to the 1960s, the second period is from the 1970s to the 1980s and the third period is from the 1990s until today.

As a consequence of this analysis considering with 1)the discourses of influential authors and their way of writings and 2)the suitable image of Brazilian soccer in each period, we find out the following points:

1. In the first period (from the 1940s to the 1960s) we recognize the LOCAL viewpoint, which paid attention to the black and the mestizo soccer players in Rio de Janeiro against the racism.
2. In the second period (from the 1970s to the 1980s) we recognize the NATIONAL viewpoint, which focused on the people surviving in Brazilian society under the military regime.
3. In the third period (from the 1990s until today) we recognize the GLOBAL viewpoint, which is watching Brazilian soccer in the international context of globalization.

Key Words: Brazilian soccer, image of the history, soccer style, discourse

^{1*}Kochi Gakuen College, Department of Early Childhood Education and Care, Email: eisaku@kochi-gc.ac.jp